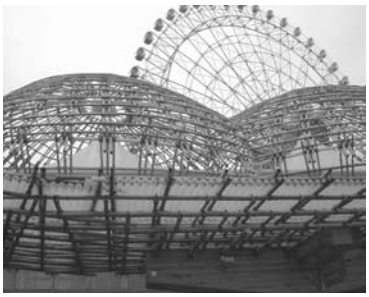
UIFA JAPON NEWSLETTER

NO.64 Aug. 25, 2005

■主な内容

・2005年度 UIFA JAPON 第13回通常総会報告
・「名古屋歴史的街並み見学会」参加記
・特別寄稿「水の安全・安心－災害は死角を突いてくる」
・ベルリンでの雨水利用
　～エコロジーな街づくりモデルプロジェクトの体験から～を聞いて
・「スマトラ沖地震の復興プロセスに学ぶ」
・海外交流の会参加記―１
・海外交流の会参加記―２
・愛・地球博を見学して
・追悼　中善寺紀子さんが急逝されました
・この指とまれ「高齢者グループハウス『ほっと館』見学」のご案内



愛・地球博：長久手会場

記念講演講師　尾関利勝氏

2005 年度 UIFA JAPON 第 13 回通常総会報告

6 月 25 日（土）1 時半より、名古屋市市政資料館に隣接する「ウイル愛知」＝愛知県立女性センターで、第 13 回総会が開催された。委任状を含む出席者 58 名で、会議は成立した。二日前に一年間のスウェーデンでの研修を終え、帰国されたばかりの小川信子会長が議長を務められ、書記は伊藤京子さん、議事録署名人を藤田淑子さん、柳沢佐和子さんにお願いした。

第一号議案の 2004 年度の活動として、トゥールーズ大会への参加や、D’aujourd’hui の新たな発行、「災害見守りチーム」の発足等が報告された。これに伴う一般会計と特別会計の収支報告と監査報告が承認された。第２号議案として、今年度の活動計画が発表され、会員証の二年ごとの発行を来年度から実施する事を報告し、満場一致で予算が成立した。事務局の移転も報告された。

会員により完訳された、『建築の理論と実践による女性の歴史』=著者：セナ・セリックさん（クロアチア）の本を会場で領布した。

名古屋の会員のご尽力により、愛・地球博による繁盛期にもかかわらず、会場も宿泊も素晴らしい所を設定して頂きました。又伊藤京子さんからは本場瀬戸の焼き物=万博記念の角皿を銘々おみやげに頂きました。（中野晶子）

総会記念行事
「名古屋歴史的街並み見学会」参加記

今年の総会記念行事は、総会会場でのレクチャーに続き実際の町に出ての見学会、更には懇親会も保存活用の一例であるレストランで行うという、名古屋の歴史的町並みを堪能するものだった。講師は（株）地域計画研究所名古屋事務所長を務めるかたわら、歴史的町並み保存に取り組んでいらっしゃる尾関利勝氏をお迎えした。

見学会は白壁・主税町（ちからまち）・橦木町（しゅもくちょう）というコンパクトな武家屋敷町をルーツに持つお屋敷町だったが、尾関氏のレクチャーは白壁地区を尾張の地形形成から近代までの壮大な名古屋の歴史の中で位置づけ、その上で町並みの特徴を語るものだった。また、お屋敷町＝住宅地であるが故の保存の難しさを話された。その一つ、どうやって残すか、活用方法の問題は、市民の市民による市民のための文化講座「白壁アカデミア」を立ち上げ自分たちの勉強の場として残す試みをされているとのことだった。

尾関氏と、橦木町の洋館と和館を繋いだ豊田佐助邸の説明を聞く

講師の案内で見学した豊田佐助邸は２階建ての洋館に和館を繋いだ近代住宅。洋館を主屋とするのは大財閥の邸宅等と同じである。和館の座敷が広々として風通し良く、炎天下の町歩きで一時の涼風を楽しんだ。

自由見学ではモルタル等を一切使わない石積の擁壁や、瓦屋根の正面に教会の尖塔だけ乗せたカトリック教会等を見て、往時の技術や発想に感嘆し、相続で集合住宅になってしまったものの生け垣や門だけは残し「見越しの風景」を残したものに現代との折り合いのつけ方を学んだ。

玉石を六角状に積む当時の石工の技術。白壁町

再集合した「文化のみち二葉館（旧川上貞奴邸）」副館長西尾氏にご案内いただいた。町並み保存地区のすぐ外側だから出来た移築再生であり、保存地区を孤立した町並みにしないプロジェクトでもある。復元された大広間や創建当初のままの和室（国登録文化財）も素晴らしいが、町並み保存に果たす役割の大きさは計り知れないと思った。

今回の見学会は、歴史的町並みや建物の紹介だけでなく、住宅地の町並み保存のあり方や周辺の町並みとの断絶の問題の解決例を実地に見せていただく示唆に富む企画だった。もっと見たい、聞きたい、話したい、そんな総会記念行事であった。（石川和代）

特別寄稿

「水の安全・安心―災害は死角を突いてくる」

特定非営利法人「ア！安全・快適まちづくり」理事長　石川金治

■災害の死角とは

昨年は日本に上陸した台風は10個を数えた。過去50年の記録は6個が最大であるから、2倍近い大幅な記録更新である。寺田寅彦の警句「災害は忘れた頃にやってくる」は、今や死語になったような気がする。当NPOでは「災害は死角を突いてくる」と言う警句を合い言葉に、「死角」を事前になくす災害予防を訴えている。

福知山線の事故を大きくした原因は、マンションへの激突である。曲がりきれないときに、谷底に落ちるところでは誰でも「ゆっくり走ろう」と注意する。「マンションに衝突するとは思わなかった」という考え方が、死角であり、そこを突かれて大きな被害になった。

福岡沖地震では、阪神大震災後に建てられた堅牢マンションで、間仕切り壁の被害のため玄関の戸が開かなかった。これは、間仕切り壁で地震エネルギーを吸収する仕組みからやむを得ないことではあるが、火事の時には避難できない死角となる。この死角除去が技術者の義務である。

■東京０ｍ地帯での死角

東京の0m地帯は地盤沈下という公害により、輪中堤がなければ海の底であり、人が住むところではなく「魚が住む」ところになる。地震で、破堤したり排水ポンプが停止したりすれば、たちまち海の底になり溺死者がでる。しかも近くに台地がないため安全な避難場所はマンションなどのF3以上の共有空間だけである。

下の写真から中川左岸が住宅連坦地域であること、荒川には幅広の平常水位より高い高水敷があり、中川左岸より安全性が高い。即ち、モデル地域は地震時水害が起きやすいところであることが分かる。

先に発表された首都圏直下型地震の被害想定では、この様な地震時の水害が全く加味されていない。大地震に耐えられるように作られた新幹線でも、構造物破壊を想定して「ユレダス」（運転手が地震を感知しない初期微動時に急ブレーキをかける自動停車装置）というシステムを導入している。これも死角除去の一方法である。

■死角除去のために

私たちが提唱するスーパー堤防は、地震による堤防崩壊があっても平常水位による浸水を防止できるように、民地を幅広く盛った構造のものである。ここは人工の台地となり避難広場にもなる。地震時破堤による浸水防止と万一浸水したときの避難場所確保という二つの死角を同時に除去可能な方法である。また、近隣の一時避難場所として幅広の廊下などを付置した高級感のある再建住宅を提案する予定である。

住宅連坦地域改造モデル地域（中川沿い）

平成３年３月作成　　中川　４／９

ベルリンでの雨水利用

～エコロジーな街づくりモデルプロジェクトの体験から～を聞いて

福井　綾子

第36回海外交流の会に参加しました。

当日の午前中、雨水東京国際会議に参加したメンバーが墨田区内雨水利用施設の見学会の後とあって、会場にはその熱気にあふれていました。

講師は、ベルリン市役所都市開発局技術担当官のブリジット・ライヒマンさんです。８月１日ー７日まで開催された、雨水東京国際会議に参加されての最終日でした。

当日は、二つの事例について説明がありました。最初に女性の会による事例の報告。次に大学の研究室のリノベーションの報告でした。

はじめに、「水の都市ベルリン」の環境政策についてお話していただきました。

ベルリン市における雨水利用の関する、細かい数字の報告がありました。年間降水量は、645kℓ／年。水道使用量は、121リットル／日人。これを100リットルに減らすことを目標にしていること、運河の利用、表面水、地下水、水質基準のこと、雨水、雨水課徴金、道路、湖、河川、緑化、鳥の巣などなど。

事例の一つ目は、1989年に発足した、女性の会による、＜女の街＞との関りです。女性の会は2005年現在会員15,000人。その中の４人のメンバーが中心となって取組んだもので、内１人が建築家。『女性起業家センター』です。 旧東ドイツにあった化粧品会社の建物を買い取り、社会的・文化的・自立を目指す＜自立支援の場＞としたものです。汚染物質の除去からの関りです。

ベルリン市としては、エコロジー建築のコンセプトといえる『元々有るものを使用』『改修』『再生可能』『耐熱性素材』『断熱性のある素材』に沿っていることや、『雨水利用のデータ』『ソーラー装置』についての＜効果及びデータの公開＞条件として財政的支援を行った経過の説明がありました。

この建物について会場から多くの質問に答えていただきました。事業の運営は女性が行っていること、ソーラー装置によってキッチン、換気装置をまかなっていること、雨水や屋根の雨水の利用によって緑化のための撒水をしたり、地下水として浸透可能にしていること、節水型トイレ（６リットル）や節水型洗濯機の使用、屋上緑化、日影をつくる植物の種類までです。

事例の二つ目は大学の研究室のリノベーションの報告でした。屋上緑化、池の水を地下に浸透、壁面の緑化などの取組みについてでした。

雨水課徴金の仕組みについての質問もありました。下水管に流れ込む雨水の量が皆無または少量の場合は、雨水課徴金も無料または小額となるという仕組みについてです。

ライヒマンさんはアインシュタインの言葉を引用し、参加者から質問を促し、ベルリンで再会しましょうと結びました。

印象的だったことは、壁面緑化に適した植物についても、雨水の利用についても、データを公開していること。失敗例もオープンにしていくことが、今後の取組みに有効であるとの発言でした。

ドイツのある銀行の冷房例ですが、水の管を天井部分に配置して冷房にしていることを聞いたことがあります。

質問しませんでしたが、とても面白い考え方だったので今度お会いしたら、その効果についてうかがってみようと思いました。

Gründerinnennzentrum
Der Weiber
Wirtschaft eG
女性起業家センター

第 35 回海外交流の会
「スマトラ沖地震の復興プロセスに学ぶ」

講師：上智大学大学院　中村真珠

昨年 12 月末のスマトラ沖地震・津波発生から、早くも半年が過ぎました。わたし自身は被災者ではありませんが、この半年は津波と共に過ぎ去った日々でした。津波発生から２週間後の１月中旬、その２ヵ月後の３月中旬に、タイ南部の被災地を訪れました。そこで出会ったのは、悲しみに打ちひしがれる姿というよりも、力強く立ち上がろうとしている人々の姿でした。

わたしが見聞したことはほんの一部ではありますが、その復興プロセスからは、多くの学びがありました。例えば、恒久的住宅にしても、それを誰が計画、建設するかによって、大きな違いが生じてくるのです。タイの軍隊は、20 ㎡の、一部屋・シャッターとドアがひとつ・窓が２つのコンクリート製の住宅を建設していました。それは、あるＮＧＯスタッフに言わせると「家というよりもコンクリートの箱」で、わたしの眼にもそのように映りました。一方、あるＮＧＯネットワークが被災者の住民たちと３日間話し合ってデザインした住宅は、木造高床式住宅でした。コンクリートと違って、床は自然の隙間ができていて、風通しがよくなっています。これを、住民は「これが“自然”のエアコン。排水、ゴミ捨ても自由自在で過ごしやすい」と語っていました。

ひとたび、“被災者”になると、”弱い立場“に置かれ、自らの生活や人生に関わる重要な決定を、外側の人々に代理されてしまうことがあります。特に、「助けてあげたい」という善意によって独自の計画が実施される場合は、何が良いことなのかが見えにくくなってしまうので難しいと思います。実際、海外からのボランティアが善意で建てた恒久的住宅は、地元の人々の生活に合わず、供給過多な上、住みたがる人がいない、という話も聞きました。しかし、タイ国内のＮＧＯネットワークは、＜当事者が決定することができる枠組みをつくる＞という理念を持って活動していました。しっかりと当事者と話し合い、当事者の声をまとめ､形にしていこうとしていたのです｡このことは、どこの被災地においても、そして開発支援の現場や、普段の日常生活においても重要なエッセンスであると思いました。

わたしは今年8月に、日本からの学生10数名とともに、被災地を訪問する予定です。もはや報道されなくなった被災地で、人びとがどのように暮らしているのか、「一緒に過ごしてみる」ことで知ろう、という趣旨です。日本も、いつどこでどんな災害が起きるか分かりません。タイの被災地での取り組みから、わたしたちの今後の地域のあり方に反映させていけることがあればと思っています。

＊災害見守りチームからのお知らせ＊

災害復興に関するブログを立ち上げ！

UIFA JAPON 災害見守りチームでは活動や案内などの情報をいち早くお知らせする、ブログ
（http://blogs.yahoo.co.jp/saigai_uifa）
を開設しました。下記アドレスに送っていただければ、ご意見なども取り上げます。どしどし情報をお寄せください。

メイルアドレス：saigai_uifa@yahoo.co.jp

海外交流の会参加記－１

上智大学大学院　前田　悠

今回、中村真珠さんがお話下さいました内容のポイントは、津波発生後のタイにおけるコミュニティー・レベルでの取り組みの基盤が、実は津波発生以前から既に構築されていたという点であり、そのことを分かり易く説明して下さいました。津波発生以前のコミュニティー・レベルでの取り組みについて、そして津波被害の状況、津波後の被災者の取り組み、その問題点、ビデオ上映など、非常に内容の濃い発表ではありましたが、災害時における中央政府、地方政府、NGO、住民組織、そして被災者による多層的な取り組みの重要性を実感しました。

中村さんの講演会の帰り道で考えていたことは、被災地での恒久的住居の再建についてです。タイの被災地では、政府による画一化されたデザインの再建住居ではなく、建築家と協力して、より安価に自分達の生活に即し、もとの住居に似た再建住居をデザインしている被災者もいるそうです。しかし、愛する家族や親族を津波によって失った被災者にとって、亡き人の面影を抱きながらもとの住居に住むほうが好ましいのか、全く別の住居に住むほうが好ましいのか。もしくは被災者の心の痛みを和らげることができる住居という第３の道があるのか。私は建築に関して、また世界各地の被災地について無知の身でありますが、被災者の心のケアができるような被災後の住まいについて､UIFA-JAPON 会員の皆様による今後の取り組みに期待を抱きました。

親戚が津波に飲まれ行方不明の男性

私は、中村さんの助けをお借りして、タイの被災地について情報収集をしており、今回中村さんがご説明下さいました、被災者が抱える土地問題に強い関心を抱いています。タイの被災地では、被災民の土地を奪いリゾート地などの観光用地にしようと目論む投資家の動きがあります。私は津波後の不正な土地収奪に抗議する署名活動を行い、６月末にタイ大使館、タイ政府観光庁に署名を提出致しました。今後も中村さんと共に、タイの被災地について、タイの新聞の翻訳や現地調査から得られた事実について、情報発信していく予定です。当面は以下のブログに情報を載せていますので、御支援・御助言のほど何卒宜しくお願い致します。

＜スマトラ沖大地震・インド洋大津波＞

被災者支援のための署名活動　　http://blog.goo.ne.jp/joepassjim/

海外交流の会参加記－２

森田美紀

中村さんは､上智大学大学院に在籍され､地震発生以前からタイ国に留学し､NGO・Asian Coalition for Housing Rights (ACHR)及び、CODI (Community Organizations Development Institute) でタイ国における貧困コミュニティーの調査・研究をしている方です。知的で、清楚で明るく、かわいらしい方という印象を受けました。

2003 年（地震発生前）CODI 制作の「安定した住まい計画」（低所得者向け住宅プログラム Baan Eua Arthoen）のビデオは、タイのスラムに暮らす人々が自分の力で家を持てるよう CODI が協力し支えていくという､大変すばらしいものでした。CODI は貧困コミュニティーに対して、住民自身の力を育て、支えるというスタンスで活動を続けるタイ政府の社会開発生活保障省に属する公共機関です｡直接プロジェクトを推進していくのは住民で､CODI はあくまでも調整役。コミュニティーをつなぎ、住民組織に対して低金利融資を行うなどの活動をしています。

スマトラ沖地震による津波の発生後､CODI は迅速に、各支援団体と連携を取り、キャンプを立ち上げ、被災者自身による計画に協力するかたちで復興を進める体制を整えました。キャンプは、津波によって被害を受けた人々自身で運営されているのです。

中村さんの撮られた今年１月と３月の被災地の様子のビデオからも、地震直後の苦しみから、徐々に生活を取り戻しつつある、被災者の被災者による被災者のための復興活動がうかがえました。

仮説住宅に花を植えている「海の民」の被災者

自然災害の前にあって､私達人間は確かに無力です。この状況で私たちが学ぶべきことは、災害に遭って愛する者、大事なものを失ってしまった被災者のために、必要なこととは何か？何をすべきか？ということを見極めて、彼らにしてあげるのではなく、協力するというスタンスで、サポートをし続けることこそが大事だということだと思います。

私自身、住宅を設計する場合、専門家として、アドバイスといくつかの方法を示しながら、一緒に作っていくというプロセスを楽しんでもらうことを大事にしています。最後は施主さんが自分で作ったと思えたならばプロジェクトとして成功だったと評価できます。

私たちの仕事はそこに住まう人の風景を作るための手助けをする役割を果たすことかもしれません。

NO.64 Aug. 25, 2005

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

UIFA JAPON 事務局
〒102-0083
東京都千代田区麹町２－５－４
第2押田ビル ㈱生活構造研究所内
Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866
E-mail: uifa@LIQL.CO.JP
発行 2005年8月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON
c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUARITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI,CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083
PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866

愛・地球博を見学して

小島久実

■自然との融和を目ざした瀬戸会場

愛・地球博：瀬戸会場
里山の森を背景に、市民参加のワークショップが並ぶ

混雑が予想される長久手会場をさけ瀬戸ゲートからのアプローチは正解で順調なスタートでした。当初の開催予定地だった瀬戸会場は森（海上の森）に入りくんでいて、パビリオンや広場も木の色と素材で統一され周囲の自然との融和を目ざしたまとまりが感じられました。

愛知県館もコンセプト館として周りの環境への配慮がされた斜面にそった建物、木材の香りが濃くただよう館内、木肌の色調などで構成されていました。終了後は一部を残し地区の交流施設とする計画です。仮設部分はリデュース、リユース、リサイクル可能な材料で作られ、外壁、床などの板材は新設小学校で再利用されると聞き原環境の維持へのこだわりが伝わってきました。

貴重な里山や森への影響が大きく取り上げられた今回でしたが、関係者の方々の努力がシンボルとしての“コナラの木”の館中心への移植などにつながっていると思え、万博後に従来の森への負荷が最小限にとどまることを期待したいと考えます。

■各館に工夫、長久手会場

瀬戸会場からのゴンドラから乗りついだ長久手会場を南北に横断するキッコロゴンドラの数分間は会場内全体の配置、建物などが俯瞰でき、始めに乗るのもおすすめです。全体の印象が見られればと入場した我々は長時間待ちの館はさけることにしましたが、パビリオンの入場規模もあり、待ちの行列は必定でした。日陰づくり、外壁に画面展示などの工夫のある所（イタリア館、スペイン館等）がうれしかったです。

スペイン館の六角形のブロック外壁の鮮やかさは目立っていましたが、変形の六角で不規則なつなぎでした。北欧共同館、イタリア館（シチリア島沖から上ったサテュロス像は美しい）はまとまったデザイン展示でした。北・中・南アメリカエリアが、広い中央広場をかこんで、同系の木材とグリーンカラーでのまとまりがすっきりしていました。

又、環状の連絡路のグローバルループは床が板道で、他にも会場の各所に板張りがあるのは足にやさしく歩きやすい工夫で好評でした。日が暮れるとこもれ火のように竹壁面から照明がすき出した日本館など、会場の雰囲気が変わり落ち着いた時間帯を過ごすことが出来ました。

瀬戸会場：愛知県館は、急斜面に立体的な構成。中では、地元の小中学生による昆虫箱のテーマで廃材を利用した作品が、競い合う。

■今後に向けて

自然・環境をテーマとした今回の地球博で、多くの映像展示などから見学者が楽しく学んで得られる工夫は盛り沢山に見えました。仮設とはいえ建てられた大規模なパビリオン等の建設時、万博運営中、また終了後に真にテーマが実現されていたかが、これからの 21 世紀への呼びかけとなるのではないでしょうか。最後に、万博見学のチャンスと情報をいただいた名古屋のメンバーの方々に感謝いたします。

追悼

会員の中善寺紀子さんが、５月 25 日に急逝されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

時代を先駆けた紀子さん

会長　小川信子

ストックホルムで中善寺紀子さんの訃報をいただきました。昨年３月、ＵＩＦＡ　ＪＡＰＯＮの有志の方々が、歓送会を開いてくださった時、紀子さんと久し振りにお逢いしたので、そのときの笑顔が思い出されて信じることができませんでした。紀子さんと初めてお逢いしたのは、たぶん、中学生の頃でした。それはお父上の中善寺登喜次先生が、長年に亘り、日本女子大学の住居学科で非常勤講師として、私どもをご指導くださったからです。その後、住居学科に入学された紀子さんと、交流が続きました。紀子さんは、先生の誠実かつ几帳面な、お人柄とそして木造建築に対する造詣深い資質を受け継がれ、日本の伝統的な木造住宅の再生を設計、研究者の目で詳細を見つめられて優れた仕事をしておられました。

中善寺家のご長女で、ご両親の希望もあり、学生時代に結婚され、社会人としての早い出発でした。そして、ご主人様の協力を得て、家庭人としてお子様方を立派に養育され、建築家としても数多くの仕事を残されました。時代を先駆けて人生を歩まれた紀子さんは、人より早く人生を駆け抜けられたように私には思えます。ここに心からご冥福をお祈り致します。

編集委員から

中善寺さんには会報 43 号に「私のとってのユニバーサルデザイン」シリーズとして「メイス氏のユニバーサルデザインから」を寄稿していただきました。そのなかの「まさに民家の改修はＵＤそのものであると言える。更に彼（メイス氏）が主張している言葉『ＵＤは単にものを作る技法ではなく、社会を作り直す技法である』は、我々建築設計を業としている者が常々考えていることと全く一致するのである」という文章を、ご記憶の皆様も多いと思います。次回会報のテーマ「再生・保存」について語って頂きたかった方の追悼となってしまいました。（井出幸子）

この指とまれ

高齢者グループハウス「ほっと館」見学のご案内

日時：2005 年 10 月 29 日（土）2 時～4 時
場所：江戸川区中央 2-4-7
※集合場所等詳細なご案内は別途お送りします。

東由美子さんが設計したグループハウス「ほっと館」が、今年の初めに完成しました。「自律」と「協働」をキーワードに、1 階に NPO「ほっとコミュニティー江戸川」事務所、コミュニティー・レストラン「ほっとマンマ」、小児科診療所「石橋こどもクリニック」、２階と３階に各 5 室が DK を囲んで配置されています。花壇の手入れをしながら近所の住民と立ち話ができるなど、コミュニティーとの関わりが重視されたこの施設は、今後の高齢者施設のひとつの形を示しています。東さんに案内していただく見学会を企画しましたので、ぜひご参加ください。申し込みは、10 月 21 日までに UIFA JAPON 事務局へファクスまたはメールで。（田中厚子）

データ：鉄骨造 3 階建　敷地面積 338.54 ㎡、床面積　563.54 ㎡

役員会報告

第２回５月 23 日：第 35 回海外交流の会「スマトラ沖地震の復興プロセスに学ぶ」の最終調整。名古屋での総会、記念講演+見学会について、現地会員との連携などを検討。
第３回６月 15 日：「スマトラ沖地震…」の報告。総会の議案、会計報告案の提示、修正、承認。会議運営、進行など協議。同日の記念見学会の詳細検討。「セナさんの本」購入方法の検討。
第４回７月 12 日：総会の総括。第 36 回海外交流の会「“水の都市・ベルリン”の雨水利用と生活」について検討。「ほっと館」の見学を秋に企画。武田伍一設計の「求道館」見学案の検討。
第５回８月３日：第 36 回海外交流の会について打合せ。「震災復興まちづくり支援プラットフォーム」への参加とブログ立ち上げ、11 月 12 日（土）の講演会開催について承認。７月 23 日の地震についての緊急アンケート実施について了承。

編集後記

少なくとも、ビルで海風が遮られることのない都市造りを（田中）クールビズに 28℃の室温設定、ついでにシエスタも取入れたい！（石川）私達女性には、生命と物と自然との繋がりを、合理的に体現できる POWER があるのかも（中野）Berlin からの講師 Reichmann 報告に刺激を受けて持続可能な住宅・まちづくりを促したいものだ(渡辺)次号は再生・保存がテーマです。こんな保存の方法、こんな再生・再利用の方法があるが等、自薦・他薦の情報をお待ちしています（井出）地震国日本、間近に迫るというその時、あなたはどうする？（編集長須永）